

梅花短大 冢本 修 大阪科学教育センター ○ 西沢 悦子
大正高校 佐藤 友紀 鳴門教育大 広瀬 月江

【目的】 被服の教育の中で社会的機能の教育が少ない現状がある。また、生徒にとっても被服の着用と社会的な規範や意識との関係について、知識不足に対する不安と学習への意欲があると見られる。そこで、高等学校において社会的な機能の教育の有効性と評価の検討をおこなって、被服教育への被服心理学の位置付け、さらに有効な方法について明らかにしたいと考える。本報では、高等学校生徒に実践授業をおこなって、生徒の被服の社会的機能についての認識と社会的規範の認識の変化が求めたので報告する。

【方法】 授業実践は、平成3年2～3月にかけて実施した。実施校は、大阪府立T高等学校である。対象は、普通科2年生女子196名である。事前調査は、集合調査法による質問紙調査である。授業実践は、各クラス2時間で、パネル提示とSD評価、グループ・成人比較、クラス討論をおこなった。事後調査は、感想文調査と同一項目による質問を実施したが、これは授業時間に含まれていない。

【結果】 事前事後の差異から：①もっと学習したい項目については、「被服の流行」が事後に増加している（ χ^2 :TEST, $P<.01$ ）が、ファッションへの関心度については、変化が見られない。②似合う服装については、「似合う服がわかっている。よくわかっている」が事後に増加している（ χ^2 :TEST, $P<.01$ ）。③おしゃれに対する要素意識では、「衣服の清潔感」が増加し（ χ^2 :TEST, $P<.05$ ）、「衣服の流行を取り入れる」のが減少傾向にあった（ χ^2 :TEST, $P<.10$ ）。④外出時に衣服の選択を「考えない」が事後で減少傾向を示している（ χ^2 :TEST, $P<.05$ ）。これらからおしゃれに対する意識の変動が認められる。